

シモーネ・ケルメス

Simone Kermes
●ソプラノ

取材・文・写真=中 東生

異端児扱いだったケルメスは遅咲きの大輪 宗教観まで変えたクルレンツィスとの出会い



『バロック界のレディガガ』と称されるシモーネ・ケルメス（独語ではジモーネと読まれるが、本人はシモーネと発音する）は遅咲きの大輪だ。4月28日、ドイツ・ミュンヘンで催されたエイズコンサートでも、自作のドレスをパンキッシュに着こなし、ロックスターのように客席を湧かせたが、翌日のインタビューでは繊細さと傷付きやすさを内に秘めた姉御肌の素顔に触れることができた。

「5歳の時、オペラハウスのような大舞台に紫のドレスで立っている夢を見て以来、いままでずっと歌い続けてきました。ライブツイヒ放送児童合唱団に入りましたが、11歳の時に父が肺癌で他界し、秘書になることにしました。勉強中に子供を身籠りましたが、子育てしながら家でできる秘書の仕事を得て、音楽大学に通いました。当時はパンクヘアでしたので異端児扱いでしたが、卒業後はコブレンツ劇場と3年間契約しました。

テオドル・クルレンツィスと出会い、ノヴォシビルスクのオペラハ

ウスに昼夜を問わず籠ってパーセル《デイドとエネア》を録音したのは強烈な体験でした。彼とはモーツァルト「レクイエム」や「フィガロの結婚」、《ゴジ・ファン・トゥツテ》も録音し、その経験は「信仰より社会主義」の東独に育った私の宗教観も変え、彼が教父となってモスクワ最古の東方正教会で洗礼を受けたほどです。

最新CDはタイトル通り、広義の「愛」がテーマです。世界情勢を見ても、自分の人生においても、今はゆつたりとした内なる魂の声を聞くことが必要だと感じます。愛が一番大切なことです。人を愛すること、そして愛されること。戦争に対する恐れも広がってきており、平和に対する愛も欠かせません。純粋で汚れないこれらの音楽は、コロラトゥーラの超絶技巧よりずっと難しいのです。正直に内面を表現するしかないからです。よい挑戦となり、終演後は幸せを感じられます。いつかこのプログラムを携えて、日本にまた行きたいです。